

甲斐国分寺跡発掘調査概報

1970

山梨県教育委員会

序

甲斐国分寺跡は、東八代郡一宮町国分の現在臨済宗に属する国分寺境内を中心とする41,000平方米が国の史跡に指定されています。

この甲斐国分寺跡は、講堂跡に20余個、塔に14個の礎石かのこされています。このほか指定区域には回廊、中門等の遺構が遺存することが推定されていますが、指定以後これらの遺構の確認がされていませんでした。

近年一宮町における桃の栽培が盛んとなり、指定区域内の農道の拡幅工事が計画されたのを機に、遺構を調査し、今後の甲斐国分寺跡の保存対策の資料とするため、国庫補助金を受けて、昭和45年8月発掘調査を実施したものです。

また、本調査報告書を活用し、広く一般の方に、甲斐国分寺跡にたいするご認識を深めていただければ幸いと存じます。

なお、この調査にあたられた調査員ならびに地元一宮町の方々のご協力に厚く感謝申し上げます。

昭和46年3月1日

山梨県教育委員会

教育長 鶴 田 熙

甲斐国分寺跡発掘調査參加者

調査員

山内 昭二 日本大学三島高等学校教諭
根本 庸光 同
橋本 慶正 帝京高校教諭
内田 敏明 沼津市原小学校教諭
佐藤 政治 富士市吉原中学校教諭

補助員

森本圭一、種田齊吾、新津健、菊島美夫
藤田仁、馬駒野行雄、山崎金夫、山本正則
中島芳美、塙川裕貴子、村上賢一、折原春樹
飯島富美夫、有賀昭、林弘子（順不同）

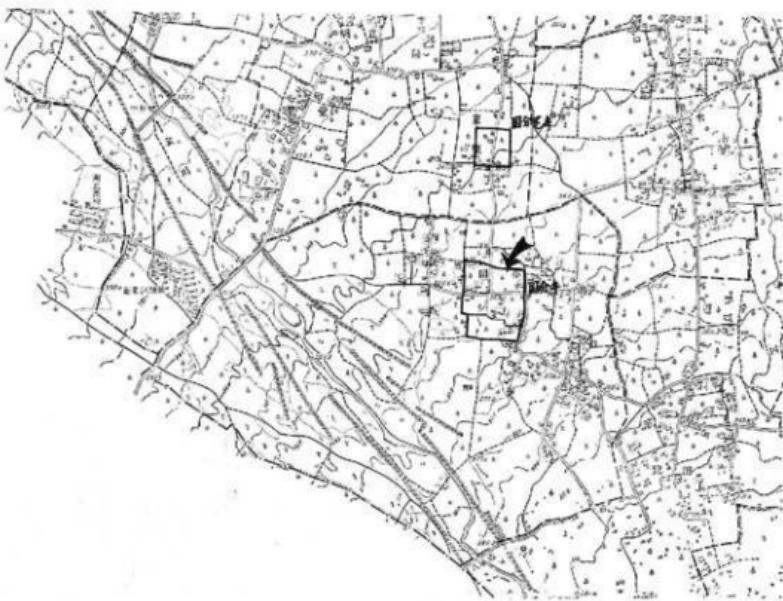
國庫補助 ～500,000
墨費整理 4/4回

目 次

は じ め に	1
1. 門 址	3
2. 金 堂 址	4
3. 回 腹 址	7
4. 塔 址	7
5. 出 土 遺 物	10
ま と め	11

挿 図 目 次

第 1 図 遺跡付近図	1
第 2 図 甲斐国分寺全体図	2
第 3 図 門址土層図	4
第 4 図 金堂址石敷及び基壇土層図 ..	5
第 5 図 瓦出土状態図	8
第 6 図 瓦溜土層図	7
第 7 図 塔址南壁土層図	9
第 8 図 塔石段実測図	10
第 9 図 瓦 拓 影	12
第10図 タ	13

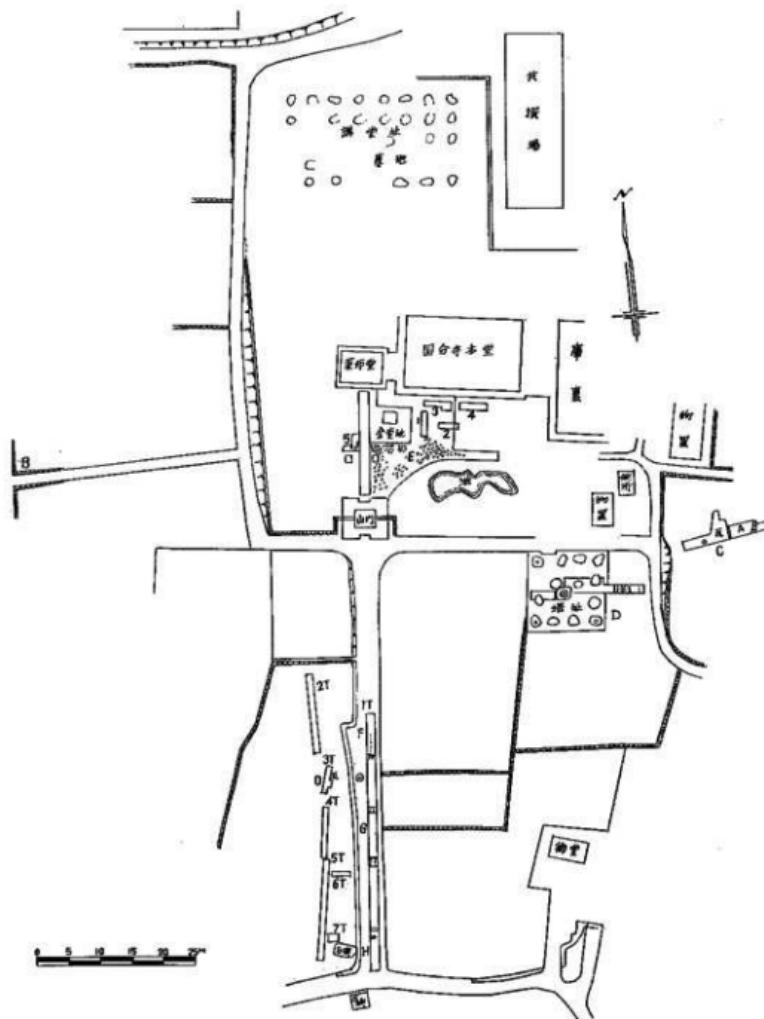


第1図 遺跡付近図(東八代郡一宮町)

甲斐国分寺発掘調査概報

はじめに

山梨県東八代郡一宮町国分所在の史跡甲斐国分寺の発掘調査が昭和45年8月5日より同年8月25日迄20日間、文化庁及び県教育委員会の手により実施された。今回の調査の目的は、農道の拡張にともない、史跡の南部分の確認と、史跡内が戦後水田から桃畑に変更され、近年給水設備の施設工事等によって、遺構の一部が破壊され、瓦列が発見されたので、その確認、更に出来れば伽藍配置を明らかにし、不明確な諸堂の位置を知りたいという欲ばつたものであった。それ故当初の計画では、南門、中門址の位置及び回廊の確認をするために相当広範囲にわたって調査する予定であったが、関係地主の了解が得られず、発掘予定地の一部を調査したにすぎなかった。そのため、明確な遺構の位置の確認はほとんど出来なかつたことは全く残念であるといわなければならぬ。幸い現国分寺住職の御好意で、史跡内の同寺所有地及び、住職氏所有地に限り、桃木の間をぬって、出来るだけ木をいためないように



第2図 甲斐国分寺全体図

トレンチを設定し、調査にあたった。以上のような理由から、今回の調査は講堂の全てにわたって調査することが出来ず、しかも、調査法もトレンチを桃木の間にわざかに入れることしか出来なかつたため、寺院址の発掘調査としては最も悪い調査方法をとらざるを得なかつた。それ故、検出された遺構を完全に露出し、徹底的にその状態を観察することも出来ず、場所によっては、何の遺構が不明のまま調査を打ち切らざるをえなかつたところもあった。しかしながら、制約された調査ではあったが、金堂、塔においては新しい知見をいくつか得ることが出来たことは収穫であった。

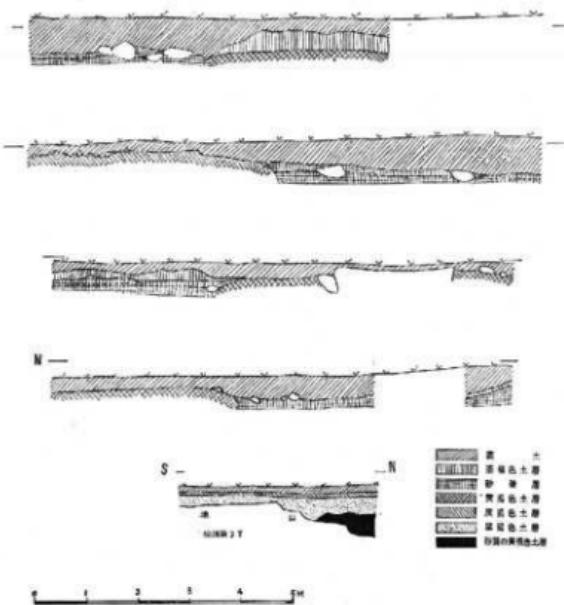
甲斐国分寺については、角田文衛氏編の「国分寺の研究」の中に仁科義男氏が詳細に報じた事実を報告され、現在墓地に露出している礎石群を金堂址と紹介された。その後大田静六氏の精査によって、墓地の礎石は講堂址であることが明らかにされ、現在では、大田氏の伽藍推定地をもって、本國分寺の伽藍配置とされている。よって今回の調査でも、この推定伽藍にもとづいて各位置にトレンチを設定し、遺構の確認をおこなつた。以下、各地区別に調査の概略をしるしたい。

1. 門 址 (第3図、両版1)

南門址、中門址を確認するため現国分寺の参道に巾1m、長さ40mの第1トレンチを設定し掘り進めた結果、土層図(第3図参照)にみられるように、表土は参道をつくる際に砾石を敷いた如く暗褐色土と砾石の混合土層をなしており、第2層は茶褐色土層、黄褐色土層の部分を除いて砂礫層がかなり厚く堆積していた。この地域は扇状地の一画を占めており、傾斜もかなりみられるので、古い時期に幾度か流砂に覆われたことを物語っている。

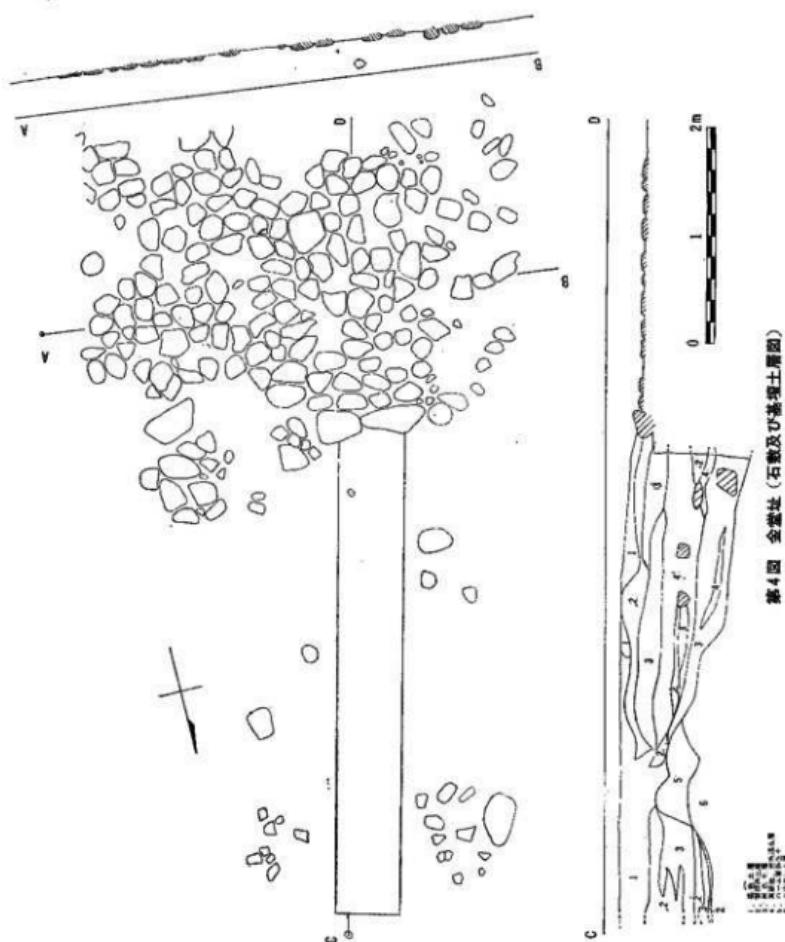
黄褐色土層は3ヶ所にみられた。第1の地点はトレンチ南側の部分で北側へ6mのところまで続き、その先端は落ちこんでおり砂礫層がその部分にのっていた。レベルは表土下70cmを計った。第2の地点はトレンチ南側より25mのところで立上りがみられ、この部分は巾8.5mを計り、レベルは表土下20~40cmの間で両端ともに落ちこみ、その部分に砂礫層がのっていた。第3の地点はトレンチ南側より34mのところで、トレンチの東半分に黄褐色土層がみられた。その巾は4m、レベルは表土下20cmを計り、南側、東側の部分に落ちこみがみられた。これら土層の関係をみると砂礫層は黄褐色土の落ちこみの上にのっており、ほぼ黄褐色土と並行に走っている状態からみて黄褐色土は砂礫層より古いことがわかり、国分寺の遺構と何らかの関連あるものと考えられたので、参道の西側即ち桃烟に参道と並行に第2トレンチより第7トレンチまで設定し、その確認に務めたが、この地点では黄褐色土層は見当らず

第3トレンチで東西に走る巾1.5mの瓦列がみられただけであった。この桃畠は参道に比較して約50cmレベルが下り、さらに畠をつくる際に整地されたため削り取られたということも考えられるが確認にはいたらなかった。いずれにしてもこれらの土層が遺構と関連することは推測されるのでより一層の精査が望まれる。



第3図 門址 土層図

第4図 金堂址(石敷及び基礎土層)



2. 金 堂 址 (第4図、図版2.3)

金堂の位置を明らかにするため、現国分寺の山門より本堂にかけての境内を出来るだけ発掘し、遺構の確認につとめた。境内内の表土をはじめ、山門より東方一帯にかけて、雜な石敷が検出された。(第4図版参照)この石敷は、池の北側でまれにない比較的大きさのそろった。川原石がきちんと敷かれ、その北端に長手の石が2本並べられ、その石より北側は土がよくしまり、基壇となっている。中軸線寄りの石敷は、その北端が直線にそろっているが南に行くに従い、荒く、石も大きくなっている。瓦類はこの石敷の上面及び間から、小さな破片が発見された。この石敷の状況よりみて、いわゆる基壇回りの両落ち用の石敷ではなく堂前面に石を敷き並べたように考えられる。

基壇は第4図のように、地山の茶褐色土をほりくぼめ、その上に、黒色土、褐色土を交互につきかたため構築し、南の石敷の下にまで及んでいる。基壇上に掘り方などを探したが、発見は出来なかった。この結果よりみると、金堂は現国分寺の境内中央までせり出してくる結果となり、塔との間が相当せまくなつて来る。基壇の東端は確認出来ず、全く中途半端な状態で調査を終了せざるをえなかつた。

3. 回 廉 牀 (第5-6圖, 圖版4-5-6)

塔の東側の桃畠に、かつて、講堂より南にのびる土塁があり回廊であろうといわれていた。この桃畠にも、散水用のスプリンクラーが設置され、その埋設工事中に瓦列が発見されたという事を聞き、回廊基壇の瓦列がどうかを確認するために、スプリンクラー埋設構に沿って、桃木の間にトレンチを設定した。地表より40~50cmの深さから円礫層が現われ、その下より瓦片が出土し、更に、スプリンクラーの水道管に沿って、瓦が立て並べられた状態で検出された。そこで、東西に10m、南北1mのトレンチを桃木の根本いっぽいに設定し、瓦の状態の確認をすることにした。表土層を耕上すると10~50cm大の円礫層があり、これを取り除くと、前記瓦出土地点に近い範囲から瓦片が集中的に出土した。これら瓦片出土範囲の東端より東にかけて巾約2.7mのローム質の茶褐色土が盛り上り、あたかも回廊基壇の如き様相を呈していた。そしてこの茶褐色土の西側の落込の部分から、西約3mの範囲に瓦片が集中的に出土し、それらを整理したところ、スプリンクラー埋設管で一部除去されてはいたが、平瓦、丸瓦が2~11枚ずつ9列以上にわたって、立て並べられて発見された。これらの瓦は、いずれも完全で、しかも、南へ更に続いているようにみえた。第5図は瓦の出土状況の図である。瓦列を南側からA列~H列とし調査した。A列は丸瓦3枚、B列は丸瓦3枚と平瓦1枚、C列は丸瓦2枚、C¹列は平瓦2枚、D列は丸瓦2枚、E列は平瓦6枚、F列は平瓦11枚、G列は丸瓦8枚、H列は丸瓦8枚が全て外周を外にしてきちんと立て並べられていた。この瓦列を中心に大小さまざまな瓦片が四面に多量に散乱していた。出土の状況から、自然に堆積したり、屋根から落下したものではなく、人为的に並べ、集めたもので、いわゆる瓦淵様のものと考えられる。前記茶褐色土の東側落込み部分からは、瓦片は勿論、何も出土しなかった。

ローム質の茶褐色土の盛り上った部分は、いわゆる基壇として構築されたものではなく茶褐色土層の東西を深さ30~50cm程



圖五五 出土狀態圖



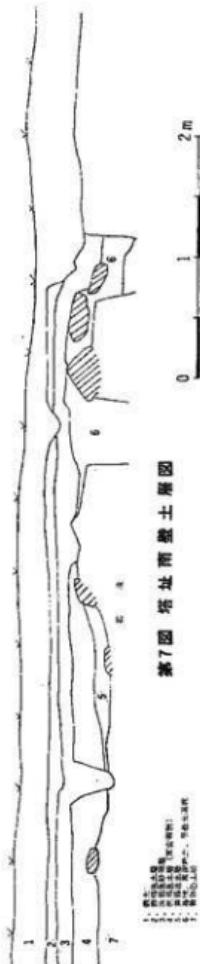
削りとり、巾2.7mの南北にのびる滝状の高まりを残したものである。この土層中より、縄文式土器及び縄文式時代の炉が発見されたことは、基壇として、特別に構築したものではないことを示していよう。

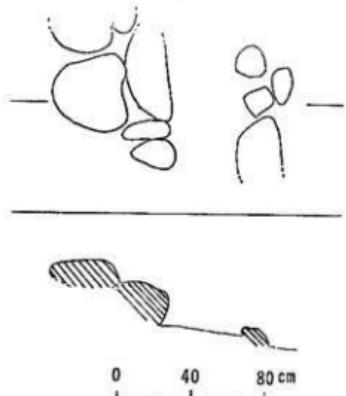
先日、西側B地点の北方で、この土層の盛り上りと同じものが発見されといふ。もしこれが南へのびて行くと丁度B地点の位置に達ならなってくる。ここは、中軸線より約60m、即ち約30間の位置にあり、A・B両地点間の距離はほぼ60間、1町にあたる。かって、土壘が存在したのもA地点の北の延長線上であり、この土壘の両側からは大量の瓦が出土しているのに、東側からは何も出土せず、その上、基壇として人為的に構築したものでもなし、唯、自然の茶褐色土層を約2.7mの巾をのこして東西両側を掘りさげたものであり、まして、この土壘上には、礎石、柱穴の痕跡すらないことから考えて、回廊址というよりはむしろ、寺域の境の土壘の裏なのではないだろうか。それ故この地域を回廊址と呼ぶのは不適当であろう。

4. 塔 址 (第7-8図、図版3.4)

現在、塔址には14個の礎石が整然と残っている。塔基壇は北側、西側で礎石いっぱいまで切りとられ石垣が積まれている。失なわれた礎石は南側の四天柱用の礎石2個、西側の第1列、北から2番目の礎石の計3個である。心礎には、径125cmの柱座があり、中央に径50cm、深さ28cmの納穴がある。また、四隅の礎石にも径20cm、深さ8cm内外の小穴が穿たれ、柱座らしき痕跡が部分的に残っている。各礎石共にほぼ元位置を保っていると思われるが、礎石の間隔に少々違いがみられる。天平尺換算で南北の柱間は10・12・10尺、東西は10.5・12・10.5尺をはかる。奇異なことには東西の柱間と南北の柱間で長さに違いがあり、やや矩形の平面をもつ、特異な塔であったらしい。しかし、現実にこのような塔が存在するのだろうか。また、四隅の小穴は何を意味しているのだろうか。

塔心礎を中心に東西にトレンチを設定し、基壇の状態を調査した。礎石の下には根石をつめ、基壇上にすえられており、…





第8図 塔石段実測図

部ではあるが根石のゆるんでいるものもあったが、トレンチ内の礎石はほぼ元位置とおもわれた。基壇は黒色土、褐色土をつきませ、石を入れて、相当丈夫につくられてはいるが、金堂基壇のように丁寧ではない。（第4図参照）東側のトレンチでは、基壇が第1列の礎石からほぼ6尺のところで一段下がり階段へも続いている。階段は平手の自然石を何も加工せず3段に積んだ簡単なものだが、トレンチの位置が塔東側基壇の中央にあたるので階段として間違いないなかろう。上2段の石は存在しているが、第1段の一つが抜けている。石段の各石には根石を入れて安定させているが、特に粘土等で固定したようにはみえなかった。この石段の前面には瓦の破片が非常に多く出土した。また、石段から東には長手の石が南北に一列並んで埋められている。石段からこの石列にかけて、土が固くなっている、おそらく、当時の地表面であったと考えられる。

東側においては、このように遺構がよく残こされているので、全面の排上をおこなって、精査すれば、石壇、基壇の様子が充分に把握出来、基壇まわりも明らかにすることが出来よう。

5. 出 土 遺 物 (第9.10回)

出土した瓦のうち、文様のある瓦についてごく概略的に紹介しておきたい。

盤 瓦

1. 素弁八葉蓮華文盤瓦

第9図1にみるように高い周縁には、1～2条の沈線がめぐり、中房は小さく、9個の蓮子がつけられている。花弁は素弁で肉が厚い出土量は多い。

2. 複弁人葉蓮華文盤瓦

第9図2のようすに周縁の内側に32個の瓣文がつけられ、中房には7個の蓮子がつけられている。1の素弁盤瓦と並んで当寺での出土が多い。この形の文葉が退化したものと考えられるのが第9図3である。複弁が形式化され、それらしい輪郭でつくられ、中に棒状の3本の子葉が形式的、装飾的に配せられている。

3. 重 図 文 盤 瓦

第9図4がそれである。掘りの深い4つの重圓が中房を中心にめぐり、中房には十字がつけられている。今回はこれ1点だけが出土した。

字 瓦

1. 第9図5は本寺でもっとも普偏的にみられる字瓦である。三つの輪を組合せて中心飾りとし、左右に唐草を配した仲々美しい字瓦である。珠文をめぐらしたものもある。
2. 第10図9は前述の均正唐草文の中心飾りが扇形の棒状飾りに変化したものであるが、文様自体にくずれが目立つ。これは門址第1トレンチの礎中から出土したものである。
3. は重孤文字瓦の破片である。作りは雑でへらで整形している。おそらく重圓字瓦と組合せれるものであろう。金堂址よりの出土が多かった。
4. 第9図7は文様区を区画し、細いせんさいな唐草の字瓦であるが、出土はこれ1片だけである。

鬼 瓦 (第10図 12.13)

薬師堂内にころがっていたもので、鬼面の牙の部分である。

出土瓦は全体に雑なものが多く、精巧なものは少ない。瓦自体にものみ痕をのこしたものが多く、文様面に、木目やのみ痕がついているもの多かった。

そ の 他

塔址及び金堂址から瓦釘が出土したい。づれも破片であるが角形の普通の瓦釘であった。

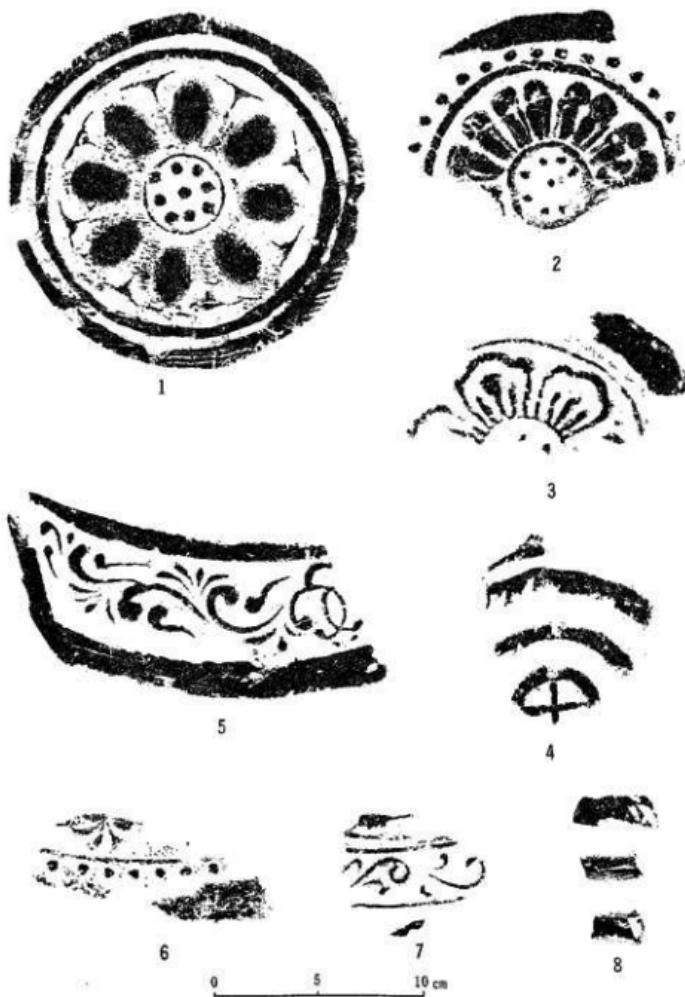
繩 文 式 土 器

第6トレンチ内より、繩文式土器が若干出土した他、瓦溜東の土壇の中からも繩文式土器が出土した。当寺域内には、圓分寺の遺構の下に、繩文式時代の集落が存在していたようである。

ま と め

甲斐圓分寺については、早くから注目され、各種の報告がなされているのでここでは、今回の調査で明らかになったことを総括し、まとめとしたい。

現圓分寺山門から南に伸びる参道上に、礎石が1個残っている。この礎石が中門の礎石でここに中門が存在していたといわれていた。また南門が中門の南の参道入口の附近に想定されていた。これらの遺構の確認のため参道を調査したが、明確な遺構を検出すること出来なかった。唯、三ヶ所にわたって、黄褐色の土層が盛り上り、奇異な感じをうけた。これが寺の遺構に關係があるかどうかは、今回の調査では明らかには出来なかつたが、この部分を



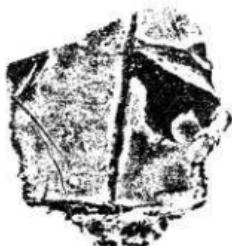
第3圖 瓦 拓 影



9



11



13



12

0 5 10 cm

第10圖 瓦 拓 影

除いて、深く掘りくぼめられていることは、何か遺構の一部であるように考えられる。特に中央部の黄褐色土層の南北から、瓦片が比較的多く出土し、第10図拓影9の字瓦もここから出土した。また、桃烟の中に設定した第3トレンチから、瓦破片が発見されたことも考え合せると、これら三ヶ所の黄褐色土が圓分寺の何らかの遺構の一部であるようと思われる。

金堂址については礎石がなく、かって存在した2個の礎石から7間4面の金堂が現薬師堂から本堂にかけて想定されていた。この位置を把握するため、現圓分寺境内で調査出来る範囲を調査したが、灯籠、庭木にさまたげられ、調査したいところが調査出来ず、残念であった。しかし、金堂基壇の前面に相当広い範囲に河原石を敷きつめた敷石があり、基壇は掘り込み基壇で、構築に相当力を入れているように見受けられたが、たまたま基壇を掘り下げた部分では、変わった造りをしていた。即ち、地山を完全に整地せず、一ヶ所盛り上がりをのこし、南北別々に基壇を構築していることは何を意味しているのであろうか。しかも、敷石の下まで基壇造りが伸びており、その上に石をのせて石敷としている。地山の盛り上りを境に、北側の方が早くつくられ、南側がおくれて集成されたことも、この基壇の妙なところである。あるいは、部分部分を区画して順次基壇を構築したのかもしれない。石敷と基壇との境には地覆石として河原石が使用されていたらしい。第4図のトレンチの端にある2個の長手の河原石がそれである。これは原位置のままのもので、東側の一側はやや動いている。この他には残念ながら検出出来なかつたが、この2個の石及び塔址の階段の河原石から考え、これが地覆石と見て差支えあるまい。これを地覆とするとこの上にどうやって東石、巖石をのせたのであろうか。あるいは、基壇の土層でみると、基壇そのものがそれほど高くなかったのかもしれないが、塔址でみると、相当な高さをもっているので、この点については今後の検討をまちたい。調査範囲内においては、礎石はおろか、掘り方も発見出来ず金堂の状態について明確にすることは出来ず、ただ、金堂基壇の南辺の一部を把握したにすぎなかつた。東辺の確認も残念ながら出来ず、大きさがつかめなかつたのは残念であった。特に、現本堂に沿って基壇の掘り下げをおこなつたが、石塊がぎっしりつまり、掘り下げが出来なかつた。以上のように、金堂は現薬師堂から本堂の一部にかけ、境内の半ばまでが金堂址の東半ばであることは間違いない。

講堂址はかって金堂址といわれたこともあったが、現在では講堂址に指定されている。現在この場所は墓地になり礎石が墓石の下に入ったり、埋葬の度に少し埋没していったりして現在、露出しているものは少ない。堂は7間4面で東西礎石間の各巾は11・13・13・14・13・13・11尺、計88尺、南北は11・12・12・11尺、計46尺をはかる相当大きな講堂である。南側を除いて、周囲を削りとて石垣を築いているので、この部分の基壇は既に廻わされている。墓地内ながら、出来ればこの南側を調査すれば基礎構築の状態がはっきりしよう。

塔址は金堂址の東南に礎石三個を欠くだけで整然としている。礎石ぎりぎりのところで石垣を築き北も西側では基壇が切りとられている。四隅の礎石には径20cm程の穴が掘られ、しかも、東西・南北で礎石の巾が違っている。即ち、東西は10.5・12・10.5尺、南北は10・12・10尺であり、総計で東西の方が1尺長くなるという全く、考えられないような間隔に礎石が置かれている。別に勤かされた様子もない。これを如何に考えるべきか全く不思議な塔址である。塔心礎を中心にして東西にトレーナーを入れたが、礎石には乱れてはいるが、根石を入れしっかりと固定している。東側では、基壇の落ち込みとそれにつづいて平らな河原石を二段に積んだ石段が検出された。これは第二段と第三段で第一段は根石をのこして取り去られていた更に東に長手の石が南北に並んでいた。この石段より東の部分に瓦の破片が大量に出土している。これらのことから東側の部分では基壇はよく残っている可能性が強いので、今後この部分の広範囲にわたる精査が望まれる。

塔址の東に発見された瓦溜と土壙は回廊址ではないかと思われたが、土壙自体が自然堆積の茶褐色土層を削り残したものであることは縄文式土器及び炉址の出土で明らかであることから、回廊址とするには少なからず疑問がある。第2図B地点の北側延長線上に、道路工事中に同じような土層の断面があったとのことから、中軸線を中心に東西ほとんど等距離にあり、しかも、人為的につき固めてないこと及びA地点の北側にはかかるて土堤が南北に延びていたといわれるので、あるいは上塗の跡ではないかと思われる。これを寺域の土堀とすると約東西1町という可能性がある。そして、A地点では、この土層の外側即ち東側からは全く瓦が出土せず、内側から大量の瓦片の下に、完全な丸瓦、字瓦が出土したこと等から、あるいはここまでが國分寺の寺域であったのではなかろうか。

出土瓦は調査面積が少ない割には瓦溜を発見したので多かった。量的には門址が最も少なく、金堂址かこれに次ぐ、小トレーナーにもかかわらず塔址が一番多かった。金堂址については、現地表面から石敷まで20cm程しかなく、基壇上にいたっては5~10cmで基壇面に達してしまう。その上、國分寺廃絶後、現國分寺が出来るまで何回か建立された事実があるので、整地され、きれいに片づけられた可能性が強い。そのため、発掘面積のわりには瓦の量は多くはなかった。出土した鏡瓦、字瓦は今迄発見されたものと大差はない。唯、字瓦で一種新しいものがある。(第9図7)創建時に使用されたと考えられるのは、素弁八葉蓮華文鏡瓦と復弁八葉蓮華文鏡瓦であろう。字瓦では輪を中心飾りとした均正唐草文字瓦と間隔のせまい重弧文字瓦であろう。それ以外の鏡・字瓦はこれらの退化したものである。間隔の荒い重弧文字瓦は重圓文鏡瓦と対をなすものであろう。これらの瓦の系統については、今後検討を加えてみたい。

調査の目的からすれば、予定された地域の調査が思うにまかせず、その上、桃の最盛期にあたって、桃木間にわずかなトレーナーが掘れず、寺院址の調査としては、最も悪い方法でし

か調査が出来なかったことは全く残念である。今後、機会があれば、全城にわたって、徹底的に精査されることが望まれると同時に、地方の特色ある寺院として、伽藍の配置は勿論のこと構築法の特殊性について明らかにされることを期待したい。また、現在保存されているところは勿論のこと指定地域内については現状変更することなく、充分な理解と認識の上で完全に保存されることを強く望むものである。

最後に、調査にご協力戴いた国分寺住職、芦田慎司氏をはじめ地元の方々、地元の学生生徒諸君に心からお礼申し上げたい。

なお執筆分担は次の通り。

- | | |
|----------|------|
| はじめに | (山内) |
| 1. 門 址 | (根本) |
| 2. 金 畠 址 | (内田) |
| 3. 回廊 址 | (佐藤) |
| 4. 塔 址 | (佐藤) |
| 5. 出土遺物 | (橋本) |
| ま と め | (山内) |



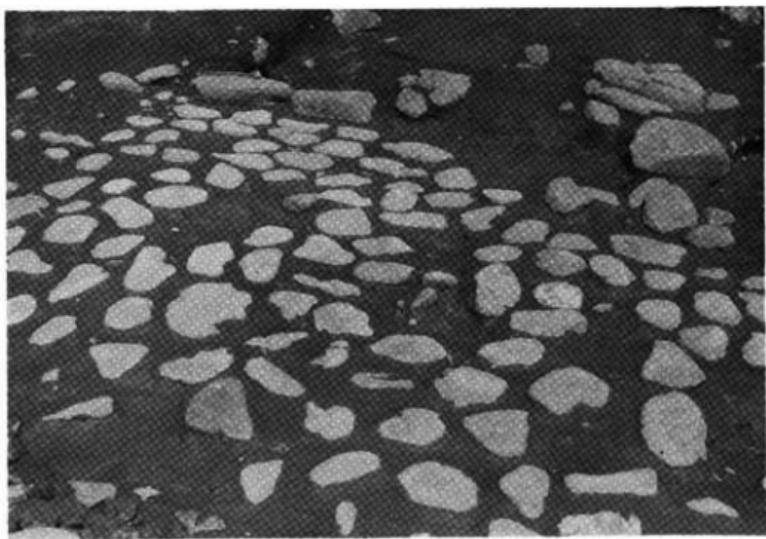
1. 門址第1トレンチ(南より)



2. 門址第1トレンチ中央土壠(北より)



3. 金堂址石敷全景(南より)



4. 金堂址石敷近影(南より)

図版
3



5. 金堂址 石敷、地覆石、基壇の状態



6. 塔址 石段 (東より)



7. 塔址石段



8. 瓦罐瓦出土状態(北より)



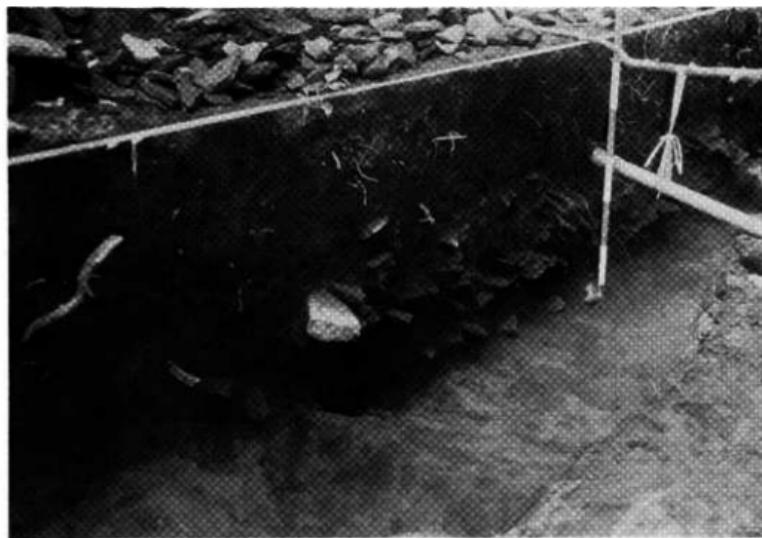
9. 瓦 潛 瓦出土状態（北より）



10. 瓦 潜 と 土 塵（北西より）



11. 瓦 潜 と 土 墓 (北西より)



12. 瓦 潜 土 墓 (北東より)

